

# 文学教育の独自性について

——ドイツ民主共和国の国語教育論から——

大 槻 和 夫

日本の学校教育では、文学科という教科もなければ、文学という科目もない。教材として文学作品がとりあげられてはいても、それは、公的には「読むこと」ないし「理解」領域の一部としてであって、学習指導要領のどこをさがしても「文学教育」という語は見当たらない。

こうした公的な扱いについては、当然、多くの批判があり、文学教育の正当な位置づけを求める声も、根強く存在している。ただ、文学教育をどう位置づけるかについては、芸術教育の一分野とするもの、国語科の一分野とするもの、芸術教育と言語教育の両方にまたがる一教科とするものなど、その主張、提唱のなかみにはちがいがみられる。そうしたちがいがあるにせよ、それらの主張には、文学教育の独自性を認める点では一致がみられるわけである。

そもそも、文学教育には、一教科ないし一科目を立てなければならぬほどの独自性があるのか、あるとすれば、それはどのようなものなのか。本稿は、こうした問題を考えていくための一つの資料を提供し、そこに若干の私見をつけ加えようとするものである。

ドイツ民主共和国の十年制一般陶冶総合技術高等学校（日本の小・中学校に相当する義務教育学校で、日本の高校一年相当までの十年間にわたる教育を行う）の教科課程では、五年年から国語科の中に文学科（科目）が設けられている。いわば、文学教育が相対的に独自の領域として公的に制度化されているわけである。

では、文学教育の独自性は、どのような点に認められているのだろうか。このことを理論的に説明していると思われる文献は、一九七三年にアウフバウ出版から出された「社会・文学・読み—文学鑑賞の理論—」（Gesellschaft—Literatur—Lesen, Literaturrezeption in theoretischer Sicht, Aufbau-Verlag, Berlin und Weimar 1973）である。しかし、現時点ではこの文献をみることはできなかった。本稿では、「文学教育第五学年—教科専門学的方法学の手引き—」（Literaturunterricht 5. Klasse, Fachwissenschaftliche und methodische Anleitung. Volk und Wissen Volkseigener Verlag 1966 1974e. S. 7~23）に述べられている論文によって、以下の記述を進めていくことにす

る。なお、本書は、学習指導要領を実践に移すための教師用指導書という性格をもっている。したがって、本書の論文も、個人の署名論文といえども、この国の公的な見解を述べたものとみなすこともできよう。本稿でとりあげる論文「Nur Spezifik der literarischen Bildung und Erziehung」も、ハンス・マルネッテ (Hans Marneffe) とクルタ・マルネッテ (Herta Marneffe) の共同論文であるが、集団討議をふまえた、公的な見解として受けとめてさしつかえなからうと思う。

### 三

さて、ドイツ民主共和国では、文学教育の独自性は、どのような視点から理論的に基礎づけられているか。まずこの点を、さきの論文を整理することによって明らかにしていきたい。次に示すのは、そうした観点から、この論文の要点を整理したものである。

#### 一、文学の特殊性

##### (一) 材料 (ことば)

1 文学の特殊な可能性

2 文学の獲得のし方

##### (二) 文学表現の特殊性

#### 二、社会主義における文学的生活の特殊性

##### (一) 文学や文学生活の歴史的に新しい質

##### (二) 芸術・文学の機能の変化

##### (三) 自己理解や探索の質的に新しい器官への文学の形成

#### 三、文学享受の特殊性

##### (一) 期待する姿勢

##### (二) 美的知覚

##### (三) 美的体験

(四) 作品に向かうことと自己自身に関連づけることの弁証法

(四) 人格的・社会的実践への転換

#### 四、文学の授業における文学学習の特殊性

(一) 個人的な享受と集団的享受の弁証法

(二) 享受過程の組織化と指導

(三) 自然的な読書・鑑賞と指導された読書・鑑賞との交互作用

(四) 学習過程との芸術鑑賞の弁証法

右にみるごとく、ドイツ民主共和国では、文学教育の独自性は①

文学が他の芸術とは異なる特殊性、②社会主義社会における文学や文学生活の質・機能・役割、③文学独特の享受のしかた、④文学の授業における文学特有の学習のしかた、の四点から理論的に説明されている。このようにして解明された文学教育の独自性は、文学科を相対的に独立した科目として設定する根拠となるばかりでなく、文学の授業の目標・内容・方法の独自性・特殊性を明らかにする理論的根拠ともなっているわけである。

では、これら四つの視点から、文学教育の独自性はどのように説かれているのであるか。以下、順を追ってみたい。

### 四

まず、「文学の特殊性」については、大要次のように説かれている。

文学は、ことばによる(ことばを材料とする)芸術である。この「ことば」を材料としていることから、他の芸術ジャンルでは不可能なことも可能になる。まず第一に、文学では、空間的時間的限界がない。「文学は、『ファウスト』におけるごとく、二十年を包括

することができし、あるいは空想小説のように、三―四千年も、宇宙的な広がりて先へ進むこともできる」時間を引きのばすことも、きり縮めることもできる。このように、時間的空間的な限界をもたないで対象を表現できる点が、文学の一つの特殊性である。第二に、文学は、「他の芸術ジャンルよりもインテンシヴに、人間思考と感情をその統一と交互作用において再現することができる」この再現は、内心の独自、体験談、話の遠近などの手法を使って直接行うこともできる。第三に、文学は、「内面的な精神生活と外的な環境との交互作用を、比較的高度に描くことができ、この基礎に立って、個人と個人、個人と社会の間の交互作用を描くことができる」。第四に、文学は、「個人の発達過程や社会の歴史的な発展過程を、そのいたりついた姿においてのみならず、直接、その具体的な発達・展開の経過において描くことができる」これら四点の可能性のゆえに、文学はもつとも洗練された芸術の部門に属するといえるし、また、劇、映画、唱歌、歌劇のような復合的芸術部門の本質的な要素となることもできるのである。

こうした、他の芸術部門にはみられない特有の可能性をもった文学は、それを獲得するし方のうえで、他の芸術部門とは異なる特殊性をもっている。

第一の特殊性は、文学がことばの芸術であることに由来するものである。すなわち、文学作品は母国語によって書き表されたものであるがゆえに比較的容易に親しめるとはいうものの、その母国語も、それを書き記す文字や文法などの体系とともに学ばなければならず、母国語の学習なしに文学を享受することはできない。また、文学における言語は、特殊な美的機能をもっており、それゆえ、文

学を身につけていかなければならぬ。文学を享受するためには、読みの教養 (Lesekultur) を身につけていかなければならない。文学は、このような学習を必要とする「ことば」の芸術なのである。

第二に、文学は、その享受の便りさ、都合のよさという点にも特色がある。文学作品は工場であく大量に作られ、広く伝播される。どこにでも持ち運べるし、その享受には特別な装置や機械もいらぬ。いつでも、どこでも読めるし、いつ読み始めても、いつ中断してもさしつかえない。くりかえし読むこともできる。こうした便りさ・都合のよさは、文学享受の特色である。

第三に、文学は、その享受にあたって、表象化の力を必要としている点に、その享受の特殊性がある。目の前にあるのは、たんなる文学記号にすぎない。それをことば化し、表象化したときにはじめて、「生きて」くるのが文学というものなのである。文学の享受には、想像の訓練が必要になってくるわけである。

第四に、文学の享受は、個人的な過程であるが、他面社会的な過程でもあるということがあげられる。作者がひとりて自分の表象と素材を原稿に移しかえるように、読者もひとりて作品にたちむかい、その内容を獲得する。そこでは、他人の影響から遮蔽される必要さえある。そういった意味では、読みは個人的な過程であるといえる。しかし、他面、文学は批評や討議の対象といえる。作品や批評家や読者などの間には、意見の交換も行われる。そのとき、文学の読みは社会的な過程であるといえることができる。とくに、文学の授業では、文学の個人的な読みと社会的な読みと要素が一つに結合される。文学批評や読者の手紙や作家の表明や社会生活から得られ

たものなども、授業の中の話し合いの中では引きあいに出される。

「この社会的なコミュニケーション過程は、とりわけ、社会主義における文学鑑賞の本質的な部分である。」

文学の特殊性は、対象とその表現方法の面にもみられる。

文学における表現対象は、一般に、「人間関係における現実」であるといはれる。すなわち、「社会的な実践 (Praxis)」が芸術の対象である。レーデカー (Redeker) は、これを具体化して、芸術の対象である「実践」とは、「特定の、具体的な人間の、感性的具体的な実践 (行為・体験)」であるとした。この見解にしたがうと、文学における表現 (形象化) は、結局、作者と現実との関係によってきまるということになる。つまり、文学形象は、「現実反映の特殊な形式」なのである。

では、文学においては、現実はどうのようなしかたで反映されるのか。

芸術における「現実反映」は、「作家と現実との関係」の反映である。したがって、「芸術的な形象化は、つねに現実把握と理想形成が基礎になっている。芸術家の美的な理想は、さらに彼の人格と社会の理想に基づいており、両者は、その根元を、その作家が属している階級の利害と世界観にもっている。それゆえ、文学の表現は、同時に現実の評価である。」この「現実の反映と現実の評価の統一」ということこそ、文学表現の特殊性の根本である。したがって、文学においては、作家は世界をあるように形象化するだけではなくて、彼の理想にふさわしくあるべきように描くのである。すなわち「現実の作りかえ、変形」が行われているわけである。結局、文学の表現は、「現実反映」「評価」「変形」の統一としての

み理解されなければならない。

文学の対象の特殊性と文学の表現の性格から、文学形象の複合性が生じる。すなわち、「文学形象の中には、事象的なもの・情緒的なもの・思想的なものが一つの全体にとけ合っており、過去・現在・未来、現実の認識・可能性・願望も同様である。同じように、リアリズム文学の表現では、個別的なもの・特殊なもの・一般的なものが一つの弁証法的統一をなしており、それが、有名な典型的状態・典型的性格の形象化といわれるものである。」

このことから、文学形象の多層性が生じてくる。すなわち、事実性としての時間的空間的できごとの層、人物の感情や思考の層、作品全体の思想や象徴的内容の層である。もちろん、これらは相互にからみあい、滲透しあっているものであって、読みにおいても、この順に明らかになってくるといわけではない。

最後に文学形象の本質として、その特殊なモデルの性格をあげなければならぬ。この際のモデルというのは、いうまでもなく現実にありのままのコピーという意味ではない。リアリズム文学におけるモデルとは、「人間の歴史的具体的な行為・思考・感情、人間の関連の構造・機能のモデル、一口にいつて人間の実践のモデルである。」

文学形象の本質は、以上の①感性的具体化性、②複合性、③多層性、④モデル的性格にあるとすることができる。

——以上が、「文学の特殊性」について述べられていることの大要である。

第二の視点は「社会主義における文学的生活の特殊性」であるが、ここでは、その詳細を省略して、ごく簡単に要約・紹介するにとどめておきたい。

まず、社会主義社会になって、文学や、文学的生活 (das literarische Leben) が、歴史的に新しい質的發展をとげたことがくわしく述べられている。ついで、社会主義社会では、芸術や文学の機能を変化したこと、文学が自己理解探索の質的に新しい器官になつてきたことが具体的に論じられている。

さて、第三の視点「文学享受の特殊性」(普通の状態で、個人々が文学作品を読む、自然な文学享受の場合の) については、大要、次のように説明されている。

読みの過程が始まる以前に、読者はさまざまな状態を経て、この本を読む時点にいたりつく。この、読み始める前の状態が、書物の受容に対する受容者の一定の立場を決定するわけであるが、このような「読む前の、その本の読みに対する読者の姿勢」を *Ewartungsstellung* (予期する構え・期待感) とよぶ。この「期待感」は、他の読者の教示や批評、本の広告、文芸批評等や、気に入った作家の本を読んでもみたいという読者の願望などによって喚起される。この「期待感」の質によって、少なくとも読み初めは強く左右され方向づけられる。この質は、わずかな時間作用する条件に依存するのみでなく、それをこえて、書物への接近の前提としての人格発達の状態にも依存している。

読みが始まるとともに、まず、文書の表象への転換が起こる。この表象化がいかに集中的に、造形的に、深く行われるかは、読

者の美的知覚能力に依存している。というのは、芸術的に形象化された文学は、ほんとうの鑑賞にたえるように注意深くことばを選び、書かれているからである。読者は、文学の享受においては、厳密な、意識的な読みをしなくてはならないわけである。この文芸的知覚は、読者に、作品の中に能動的にはいりこみ、想像力を強くすることを必要としている。こうしてはじめて、読者は作者によって作られた虚構の世界にはいりこみ、自分があたかもその世界の中にいるかのように感じることができるのである。このような作品の世界への没入を *anwesenheit* (臨場効果) とよぶ。これと似た過程は、作中人物との間にもあらわれる。作中人物になりきって感じ、考え、行動するといった、読者の作中人物への自己移入がそれである。これを *Beteiligungseffekt* (関与効果・参加効果) とよぶ。この二つの心理的的過程を通して「現実の実際の体験の表象」が読者に成立する。しかし、読者はただ作者によって作られた虚構の世界にはいりこんでいくだけではない。読者は、同時に、この虚構の世界を自己の経験と結びつけ、自己の人生観や価値観に応じてそれを評価するのである。

この美的体験の過程では、たがいにからみあった、三つの人格があらわれる。すなわち、読者の、価値表象をもった人格、作中人物の人格、作者の人格(特に、作者によって作られた作中人物の評価の中にあらわれている)の三つである。したがって、読むということは、反映された現実の単なる受容ではなく、むしろ読者の、作者や自分自身との対決なのである。そこから、同一化 (*Identifizierung*) と疎隔化 (*Distanzierung*) が起こる。同一化とは、読者が作中人物と自分とをくらべて、この人物の目標・価値表象を

受け入れることを意味する。それゆえ、この同一化は、読者が作品に描かれた人物の行動を読者自身と関連づけるときに行われる、受容と人物の評価及び自己理解、自己点検の複合物の成果なのである。疎隔化とは、言うまでもなく、この同一化と反対のことであるが、同一化も疎隔化も、読者と作品ないし作者との弁証法的な対決であることにかわりはない。

読者が異なれば作品の受けとめ方がちがいが、美的体験や評価も異ならざるをえない原因も、この心理的美的過程の中にある。享受においては、読者が享受過程で持ちこむところの読者の個別性によって芸術作品は破壊され、ある意味では多様化される。(当然のことながら、まちがった解釈、偽造された解釈は否定されなければならぬ。)文学作品の魅力は、こうした、読者ひとりひとりの、まったく個人的なとらえかたができる「遊び空間」が読者にまかされているところにあるともいえよう。文学の享受には、モデル的性格と遊び的性格とがあるのである。

(なお、この後、社会主義リアリズム文学—その享受の社会主義社会の条件—が、この美的活動性にとっていかに大きなポテンツをもっているかが述べられているが、これについては省略する。)

## 六

最後の第四の視点「文学の授業における文学特有の学習のしかた」については、次のようにまとめられている。

——生徒たちは、人生でいうと、集中的な成熟・学習過程にあるので、文学の授業においては、たんに文学を享受するのではなく、文学の享受を学習しなければならず、文学を体験し、味わい、文学のもつ人格形成の潜勢力を自分のために開頭する能力を発達させなければならぬ。

ればならない。

——それゆえ、学習過程としての享受は、自発的ではなく(引用者注、自然発生的な自発性にまかせるのではなく、という意)、文学の授業を全教科の体系の中に位置づけ、授業の組織化と教師の活動を体系的に示した指導要領を通して行われる。

——文学の授業自体の中で享受過程は、次の特殊性を示している。

- ・生徒が家庭で作品を読んでいるときには、最初の出合い(最初の享受)は、いわゆる自然な享受として広く行われている。文学の授業での作品の扱いは、すでに第二の享受である。
- ・授業自体の中で最初の享受が行われるときには、個人的な享受と集団的な享受との弁証法的な統一が現われる。そのとき、授業過程において個人的な享受過程は相互に影響されあう。その際、このような文学の授業の時間の初めの位相においては個人的な享受が優位を占め、後においては集団的な享受が優位を占める。これは特に大きな教育力をもっている。

・この全過程は、教師によって、目標と成果に向けて導かれるが、この際、個々の時間の目標と文学教育全体の目標とは、当然一つに統一される。教師による指導は、教師の知識と能力に応じて、享受過程の質にプラスにもマイナスにも影響を与えるし、美的体験や美的鑑賞を強めもすれば弱めもする。

——一般に、生徒は文学の授業外にも読書をしている。それゆえ、いくぶん私的な享受と文学の授業での享受とは相互に影響し合う。——かくして、文学の授業では、交叉し、滲透する享受過程が成立する。すなわち、

・ひとりひとりの生徒が享受する。

・生徒は、自分の享受したものを授業中の話し合いの中にも出し、他の生徒の享受に影響を与え、その寄与を通して他の生徒の享受がさらに自分の享受に影響を及ぼす。

・これら二つの過程は、主として教師によって発動され、影響される。その中で教師は、生徒の表現を評価し、授業のめざす方向に向けさせる。

——あらゆる芸術がそうであるように、文学は、芸術鑑賞においてのみ十分に作用するものであるがゆえに、しかし他方、学習は生徒にとってその年令にふさわしい主要な活動であるがゆえに、結局、生徒の芸術鑑賞はまず学習されるべきことがらであり、この意味では努力して獲得されなければならないことがらであるがゆえに、文学の授業では、教師は、文学の獲得を、学習過程としてもまた芸術鑑賞としても形成するという非常に複雑な課題の前に立たされている。この事実は、文学教育の、そしてまた文学教授法の根本問題と言えよう。

以上が、第四の視点から述べられていることのすべてである。

## 七

上記のように四つの視点から文学教育の独自性をとらえた場合、文学の授業はどのようになされるべきであろうか。この点については、一般的な結論として、次のようにまとめられている。——

1 文学と文学獲得に対する生徒の正しい構えは、本質的に、次のとおりである。

——文芸作品は、緊張した創造活動の成果である。それゆえ、文芸作品は、注意深い読みと文学の中への意識的な滲入の中であらわれ

るところのわれわれの尊敬に値するものである。

——能動的な読み、読みにおける共同の、かつ模倣的創造 (Miltund Nachschaffen) は、深い文学的美的体験と真の芸術鑑賞をひきおこす。

——この文学的読みは学習しうるものであり、高い読みの教養 (eskultur) は獲得しうるものである。それらが進歩することは、読むことの喜びを高める。

——読んだものについての教師や他の生徒との意見交換は、芸術鑑賞を高める。それゆえ、文学や文学の授業に対すこうした態度が、自分を豊かにし、発達させるために価値があるということを生徒自身が確信するように文学の授業を形成することは、困語教師の課題である。

2 文学の授業は、文学の生産、作品と享受との統一を必要とする。——積極的な、期待する姿勢を意識的に作ることは、能動的な享受の重要な前提である。

——本来の享受過程は、次のことを行う。すなわち、文芸美的な知覚、形象化された実際の感性的具体的な表象化、文学形成の思考と感情の集中的な追体験、文学形象をその複合性と多層性において能動的に解明すること。

——このことと次のことは、分かちがたく結びついている。すなわち、この美的知覚が自己の経験や自己の価値表象と結びつけられるということ、美的体験が同一化や疎隔化とともに成立し、作家の位置や自己の人格や社会的現実性の楽しい認識と評価を意味するということ。

——この美的体験は、作家においても生徒においても、具体的な内

容と性格をもったものとして個人的に刻まれるものであるから、文学作品の思想内容は、教師から生徒に移されるのではなく、個人的な美的体験を交換し結び合わせるから得られなければならない。このことは、教師と生徒とがいっしょに——教師の体験強調的関与 (erlebnisbetonten Teilnahme) の指導のもとに——作家が行った体験、発見、探索、評価を創造的に追実行すること、すなわち、わがものとすることを意味する。その本質に向かって対決が行われるこの過程の中に、個人的芸術鑑賞と集団的芸術鑑賞の基本がある。

——それゆえ、享受は、生産的創造的な行為として、同時にまた、教師と生徒との集団的な作業として形成され、意識されなければならない。このことは、生徒の再現 (朗読など) の能力の形成と自己の創造的活動 (生徒の詩など) の発達を含んでいる。

3 学校自体が社会的生活の本質的な要素であるから、文学の授業は、われわれの社会的文学的生活と結びつけられ、ふたたび個人的、社会的な実際に接合しなければならない。

——生徒は、文学作品、就中文学の授業で扱われた文学作品がわれわれの社会でどのように生きていくか、それらは公衆の中でどのように取り上げられ、議論され、評価されているか、作者と読者とはいかに意見を交換しているか、わが国 (引用者注、ドイツ民主共和国) は文学生活をどのように促進しているかを、文学の授業で経験し、体験すべきである。生徒自身は文学的生活の能動的な共同形成者であるべきであり、そこで彼らはさまざまな形で文学的生活における彼らの発言をすべきである。

——しかし、文学的生活のみならず、経済的政治的生活、つまり全

社会生活の中に文学教育は合流しなければならぬ。このことは、文学の思想的美的な問題がわが社会の問題であり、その解決のために作家や読者や労働者や国家の職員は、それぞれその社会的責任を分担しているということを意味している。

——このようなかたで、生徒は、社会的な自己理解と未来の道の探索の道具としての、わが社会における文学の新しい社会的機能を知り、文学と読者が立っている文化政策的、全社会的な関連を徐々に意識するようになる。

——以上が、文学の授業形成のための結論としてまとめられていることのすべてである。

## 八

右にみてきたように、ドイツ民主共和国では、文学教育独自の位置・役割・内容・方法を、①芸術諸ジャンルの中で文学の独自性、②社会主義社会における文学の役割・機能、③文学の読み (享受) の特殊性、④文学の授業における文学習得 (学習) の特殊性の四点から、きわめて体系的理論的に基礎づけている。その論述は、簡明ではあるが、要をつくしていると言えよう。

では、このような理論的基礎づけを支えているものは何であろうか。いまの私には、これを十分解明するだけの用意がないが、今後の研究のための仮説として、予想されることの一、二をあげてみたい。

第一には、一定の段階に到達した今日のドイツ民主共和国の社会主義社会とそこでの文化政策、教育政策が考えられる。この点については、本稿では大方省略してしまったが、ドイツ民主共和国の文学教育理論を歴史的にとらえるためには、この点をこそ明らかにす



べきであろう。そうすれば、右の文学教育理論が、今日のドイツ民主共和国の社会とそこでの文化政策、教育政策とどのように結びついているかも、さらに解明できるであろう。

第二には、長い歴史をもつ文芸学の歴史的發展とその成果が考えられる。ドイツでは、生哲学に基礎をおく解釈学（精神史的解釈学）、心理的主観主義的鑑賞論、現象学的解釈論、構造主義的解釈論など、いく多の享受理論が生み出されてきているが、今日のドイツ民主共和国もまた、これらを根本的に批判しつつ、マルクス・レーニン主義に基づく享受理論をつくり上げているにちがいない。その享受理論が、ドイツ文芸学、享受理論の歴史的成果をどのように批判しつつ継承・発展させて樹立されているのかを明らかにすることは、ドイツ民主共和国の文学教育論の特質を明らかにするためにも、必須の研究課題である。

## 九

ひるがえって、このドイツ民主共和国の文学教育論（文学教育の独自性についての論）は、私たちの国語教育・文学教育にどのような示唆を与えてくれるであろうか。最後に、この点についての私見をつけ加えてこの小稿の結びとしたい。

第一には、文学教育の独自性を明らかにしていくうえで、視点の設定に示唆するところがあるであろう。わが国の場合、文学教育の独自性を主張する人たちの論でも、ここにみられるような体系的で周到な論述はみられなかったのではないか。もしそうであれば、ここにみられる四つの視点は、私たちが文学教育の独自性を明らかにしていく際の視点として、参考になると思われる。

第二には、文学作品の読み（享受）の独自性を明らかにしていく

ためにも、示唆するところがあると思われる。わが国の場合も、この点についての解明はかなり進んではいるが、その体系的理論的整備には、なお十分でないところがあり、その点で、この享受理論は一定の参考となるであろう。

第三には、教室での（授業での）読みと教室外（家庭など）での読みとの区別と関連を明確にしている点が示唆に富んでいると思われる。この点も、わが国では必ずしも明確になっていなかったと思われるからである。

第四には、個人の読みと集団での読みとの弁証法的な関係についての論述が参考になるであろう。わが国の場合、とかく二者択一的な論が多いのであるが、両者を弁証法的な関係でとらえることは、きわめて重要であり、この点で、ドイツ民主共和国の理論には学ぶべきところが多いと思われる。（本学助教授）